

## 東井義雄教育思想に基づく「いのち」の教育

### Education of “Inochi: Life” Based on Yoshio Toi’s Educational Philosophy

川端 義明

Yoshiaki Kawabata

#### はじめに

「学校は何を学ぶところ？」と問われたら、どう答えるであろう。人によって様々であろうが、私は『いのち』の使い方を学ぶ（「生きる力」を身に付ける）ところだ」と答える。言い換えれば、「時間の使い方」を学ぶところとも言える。教え子をなくした経験もあり、管理職として学校運営に携わった11年間は特にその思いが強かった。

勿論、教師は、学校という教育制度とその法的な制約の中で子どもの教育にあたらなければならない。また、教育という仕事は、子どもを主人公としたより良い価値の追求という教師の信念に基づく行為でもある。さらに、法的な制約に基づいて考えてみると、教育基本法第1条には、教育の目的について次のように記されている。「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」と。

現在、新たな学習指導要領のもと、幼児教育を基盤として小中学校を通して「生きる力」を培うために必要な資質・能力育成のための系統的な教育活動が行われている。その目的を果たすためには、関係法令を踏まえた教育・保育のあり方を今一度見直し、「子どもを主人公」とした子どもの「いのち」に触れる教育に反映させねばならない。

こうした状況に鑑み、校長長、小中学校教諭として、バックキャストिंग（「目指す子どもの姿」を起点として「今」何をすべきかを考える）思考で「0歳から15歳までを一体的に捉えた教育・保育のあり方」を豊岡短期大学論集第18号に連載した。その続編という形で、自身の教育活動の基盤となった東洋のペスタロッチと称される豊岡市出身の東井義雄の教育思想に学び、教育の目的である人格の形成、国家社会の形成者となるべく子どもたちの育成を図るため、「いのちの教育」について考察する。

## 東井義雄の教育思想と「いのち」の教育

東井義雄の教育思想が色濃く反映されている豊岡市の教育に22年間携わった筆者は、子どもを中心に据えた「ほんものの教育」を求め続けてこられた東井の教育実践に感銘し、現在に至った。以下、東井義雄教育思想を基盤とする「いのち」の教育を志した管理職としての実践を記すが、その前に東井の経歴を簡単に述べる。

東井は、豊岡市但東町に、浄土宗本願寺派「東光寺」の長男として1912年4月に生を受ける。母親は小学校1年生の時に病死。生活も楽ではなく、貧乏生活を余儀なくされた。1932年、昭和7年、師範学校を卒業し、豊岡小学校へ着任。東井は「雑草のごとく」という文集を作って、どんな環境からでも、どういう状態になっても立ち上げられる子どもを育てようとした。1957年、昭和32年に「村を育てる学力」という実践記録を発刊し、大きな反響を呼んだ。生活から離れた学問はない。生活の中から課題を発見し、教師・地域と課題を共有し、主体的に問題を解決していく過程の中から子どもの生きた学力が確立することを発見し、実践したものであった。そこから連帯が生まれ、共感が育ち、親を見捨てず、家を見捨てず、村をも見捨てない学力が育つ。まさに「村を育てる学力」は、「いのちの教育」の実践録であると言える。東井は子どもに書くことを大切にした生活綴方を指導し、学びは生活に立脚していると考え、「ひとり調べ、分かち合い・磨き合い、ひとり学習」の学習サイクルを確立した。現在の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が重視されているが、その指導法は、まさに「主体的・対話的で深い学び」としても優れた教育実践であることが分かる。

さて、東井は彼の教育思想と実践の中で、その根幹ともいえる子どもの「いのち」とどのように向き合ってきたのだろうか。「東井義雄一日一言」にその手掛かりを求めてみた。そこには、次のように記されている。

「東井先生の八鹿小学校時代、どの教室にも黒板の左上隅に、『命は一つよ』という言葉が書かれていた。子どもたちは一人ひとり、一つしかない命を持って生きている。子どもたちは、今日もあたりまえに教室に来て、勉強したり、ふざけたり、笑ったり、怒ったりしているが、それぞれの子どもの、かけがえのない、奇跡ともいえるような尊い命を持って来ているのだ。目の前の子どもの言動に惑わされて、それぞれの子どもの命を見失ってはいないか、と教えられた。さらに、先生は、その『命』は自分が生きているというより、『生かされているいのち』『願われているいのち』だ<sup>1)</sup>と。

また、東井の言葉として「子どものいのちの袋の中には、いろんな宝物が入っています。その宝物は子ども自身さえ知らずにいるのです。教師がそれを見つけてやらなければ」とある。初等教育を通して子ども一人ひとりに授かっている「いのち」の花を咲かせようとした東井。子どものいのちに触れる教育、いのちの教育の探求者としての東井は、その実現のために、子どもと直接かかわる教師の指導力と資質能力の向上を願わずにはいられなかったのであろう。その教育哲学は常に子どもを主役とし、授業を核とした「いのち」と「いのち」のふれあいであり、それに携わる教師の

願いが色濃く反映されたものであることは、数々の東井の著書からも窺える。

「いのち」の教育を基盤とした学校経営  
～小学校教育の現場から見えてくるもの～

はじめに

校長として学校運営に携わった5年間の集大成である令和2年度のB小学校での実践を以下に述べる。私は校園長として、最初にA小学校（併設の幼稚園あり）に赴任し、学校経営を任されたときに一番考えたのが、「いのち」の教育だった。小学校は授業を幼稚園は遊びを中心とした教育活動を通して教育の目的に向かう「生きる力」を身に付けさせるための方法を考えた。その基盤にあったのが東井の教育思想とその実践であった。その後、校長としての5年間、「『命が喜ぶ』生き方を考え、自分とふるさとの未来を切り拓く子の育成」という学校教育目標を始めとする学校経営方針は、東井の教育思想を筆者なりに解釈し、その願いを具体的に教育活動に落とし込んだものである。「教育という仕事は、子どもを自分の脚で歩けるようにしてやることだ」という東井の教育思想、人格の完成を目指した「いのちの教育」への挑戦であった。

子どもたちが自立して社会の中で豊かな人生を送るためには、なりたい自分になるために自らが自らを高めていく力を培うこと、東井の言葉を借りれば「自分は自分の主人公、世界でただひとりの自分を創っていく責任者」とならなければいけない。その手助けをしていくのが我々教師の仕事である。折しもコロナ禍にあり、当たり前前が当たり前でできなくなった社会情勢の中、教育活動も大きな転換期を迎えた。そこで、今求められる新たな教育課題に真摯に向き合い、現状を把握しながら、改めて教育活動の意味付け・価値づけ（指導に対する子どもの変容と評価）することが急務であると考えた。それを踏まえ、以下のように、東井義雄教育思想に学ぶ「いのちの教育」を根幹に据えたB小学校の学校経営方針を立案し、それを具現化した教育活動の有効性を教師と子どもの両面から定量・定性評価することで成果と課題を示す。

令和2年度 学校経営方針

《豊岡市の教育（第4次とよおか教育プラン…豊岡市教育振興基本計画）》

ふるさと豊岡を愛し、夢の実現に向け挑戦する子どもの育成  
～非認知能力（やり抜く力・自制心・協働性）を子どもたちに～

夢や目標に向かい、自分とふるさとの未来を切り拓く子  
◆自ら考え、行動する子 ◆心と体を鍛え、最後までやり抜く子  
◆ふるさとを誇りに思い、ふるさとを語る子  
《9年間で育てたい資質・能力》  
・自立する力 ・学ぶ力 ・課題解決の力 ・つながる力 ・未来を創る力

図1 「豊岡南北中校区でめざす子ども像」

校訓 ～仲良く・正しく・力いっぱい～

学校教育の視点 ～常に子どもの事実に学び、子どもに寄り添う教育～

○「教育とは（教育の目的）」を常に自問する

○学校教育目標（学級目標）を軸足に置いた教育活動の実践

○学びの環境を整える（子どもの学びを居心地よくつなぎ、学びに集中できる環境）

○学校への信頼（子どもの姿）は教師一人一人の教師力とその総和としての学校力

○行きたい学校（児童）行かせたい学校（家庭）応援したい学校（地域）勤めたい学校（職員）  
づくり

学校教育目標（知・徳・体の調和のとれた人格形成を目指す）

「命が喜ぶ」生き方を考え、自分とふるさとの未来を切り拓く子の育成  
～ふわふわ言葉やきらめき行動を通して～

図2 「学校教育目標」

「命が喜ぶ」生き方（言葉や行動）とは、自分の命（心・体・頭）のより良い使い方を学び、考え、実践すること。その実践者としての心の在り方を以下に示す。

- ・口は、人を励ます言葉や感謝の言葉を言うために使おう
- ・耳は、人の言葉を最後まで聴くために使おう
- ・目は、人の良いところを見るために使おう ・手足は、人を助けるために使おう
- ・心は、人の痛みが分かるために使おう

そして、頭は、自分とふるさとの未来を切り拓くために使おう

東井の教育思想や理念をより分かりやすく教育活動に落とし込むために、腰塚勇人氏の「いのち」の授業、講演会において語られた「命の喜ぶ生き方『5つの誓い』」を活用した。「命が喜ぶ生き方の実践者」として具体的に行動に移せるようにと提案した。

#### 【目指す児童像】

- ・主体的に学び考え、進んで行動する児童（知）
- ・ふるさを誇りに思い、ふるさを語れる児童（徳）
- ・心と体をきたえ、最後までやりぬく児童（体）
- ・「命が喜ぶ」生き方を考え、実践する児童（知・徳・体）

#### 【目指す学校像】

- ・常に明るく、生き生きと活気に満ちた学校 ・常に美しく、安心・安全な学校
- ・子どもの心の居場所となる学校 ・地域・保護者と手を携える学校

#### 【目指す教師像】

- ・児童の行動を価値づけ、意味づけできる教師（みつける、ほめる、みとめる）
- ・子どもに学ぶ喜びを味わわせることのできる教師（確かな授業のできる教師）

・子どもに寄り添い、子どもと共にある教師 ・心身ともに健康で明るい教師

**基本方針** 授業を核とした学校づくり～子どもを学校、学級の中心に据えた教育～

「自分は自分を創る責任者」その意識と行動を育てる教育を実践する

**共有の実践** 子どもの幸せを願い、三者が一緒になって育てていくという姿勢

合言葉…家庭でしつけ、学校（集団生活）で学び、地域で育てる

学校…授業を核とした子どもを中心に据えた教育（一人一人が自分を創る責任者）

家庭…正しいしつけが子どもへの最大の贈り物 地域…宝として子どもを育成

**令和2年度の中心課題と改善策**

「新しい生活様式にともなう子どもたちの心の理解とケア」を最重要課題として、「人間関係における体と心の距離をどう埋めるか」と「登校しぶりや長期欠席、家庭環境が不安定な児童の増加」に対する改善策に取り組んだ。研修部や生活指導部に働きかけ、各種のデータを比較したり、関連づけたり、また実践の成果を評価することで、以下のような課題改善に向けた取組が生まれた。

**学習に向かう力を培う土台づくり（心と体、人間関係づくり）の視点からの授業改善**

**取組のねらい** コロナによる緊急事態宣言下で入学式後に学校が休校となり、ステイホームが求められた。子どもたちのストレスはアンケートの数値（「心とからだのチェックシート」次ページ参照）にも明確に現れている。6月に学校が再開され、子どもからは「早くみんなに会いたかった」「全員そろって勉強できて嬉しかった」という声が多く聞こえてきた。先行き不透明なコロナ禍において、「いのち」の教育を実践する上で授業づくりにおいてもストレス軽減、人と人との物理的な距離は保ちつつ、心の距離は離さない工夫が必要であると感じた。そこでポストコロナも見据え「心と体づくり」「人間関係づくり」を基盤とした主体的に学習に向かう土台づくりに取組んだ。

**「学習に向かう土台づくり」の3つの取組**

(1) 心と体づくり 学習に向かうために必要な心の安定と運動機能の強化（B小っ子リラクゼーションとエクササイズ）豊岡短期大学 論集 第18号を参照

(2) 人間関係づくり 話を聞き合うための「日常的な人間関係作り」つながりタイムにおいて、ソーシャルスキル、構成的グループエンカウンターを年間でプログラム化

**【構成的グループエンカウンターの基本的な流れ】**

インストラクション→エクササイズ（思考や行動を刺激する課題）→シェアリング

**【ソーシャルスキルトレーニングの基本的な流れ】**

教示→モデリング→リハーサル→フィードバック（褒める・修正）→一般化

(3) 研修との連動 「つながりトーク（話し合い活動）」を効果的に授業に落とし込む

○研修の積み重ねが、普段の授業力の向上に直結する実践的な研修

- ・協議の柱に必ず「ねらいに迫るためのつながりトークの効果的な活用法」を入れる。
- ・「体づくりの実際」「つながりの実態」「支援児童の実態と手立て」を指導案に入れる。

○研修による目指す教師の姿

- ・教師同士の同僚性の構築…「被援助志向性」を高める取組

- ・研修でリラクゼーション、エクササイズ、つながりトークを教師も体験し心を開示
- ・学校文化の形成…「この学校にいたら、授業が楽しい。授業の上達を実感できる」

### 3つの取組を連動させた授業づくりに対する効果と課題

**効果** アセスによる検証…4～6年生（同時期の昨年度と同じ児童での比較）をみると、コロナ禍で様々な制限下であり、ストレスを抱えた中ではあるが、いずれの学年も全ての項目で改善が見られた。特に非侵害の関係は大きく改善した。

**効果** 普段、あまり関わらない子との交流ができるようになった。また、授業においても、教師が聴くことを大切にした指導を心掛けたことで他者理解がスムーズにできるようになり、対話を通して繋がろうとしている様子が見られるようになった。また、つながりトークに楽しんで参加しているので、気持ちよく一日がスタートできている。

**課題** 「つながりトーク」ではスムーズに話し手に体（へそ）を向けて聴けるようになったが、自分の意見を確認する場となることが多く、他者との関わりを通して新たな考えに気付いたり深めたりする話し合いの質の向上までには至っていない。

### データで児童や教師の事実とコロナ禍における課題を把握し、改善策を立案・実行

「心とからだの健康チェック」要支援児童の割合（4～6年185人…目標値10%以下）

令和2年5月12・13日実施	7月1日	10月1日	12月11日
4～6年 26/185人（14%）	→ 32/185(17%)	→ 25/185(14%)	→ 16/185(9%)

「心とからだの健康チェック」とは、臨床心理士で兵庫県立大学大学院の富永良喜教授らが考案された心のケアに関するアンケートのこと。①なかなか眠れないことがある。②むしゃくしゃしたり、イライラしたり、かっとなったりする。③怖くて落ち着かない。④自分が悪いと責めてしまうことがある。⑤頭やおなか痛かったり、体の調子が悪かったりする。4段階で回答（「ない0」「少しある1」「かなりある2」「非常にある3」合計点数が5点以上は要注意…要支援児童）10%以上は集団として要注意。

学級経営振り返りシートを作成し、職員による自己評価→管理職との面談で活用

表1 授業づくりを支える学級経営振り返りシート

【チェック項目1】 子どもへの関わり		7月	11月	2月
1	一貫性、公平性のある指導（潜在的カリキュラムの構築）	4.4	4.4	4.5
2	遊びや会話等を通しての子どもに寄り添う指導の工夫	3.5	3.6	3.7
3	気になる児童に対して、適切な支援をしている	3.9	4.2	4.4
4	褒める種をまいたり、効果的な褒め方をしたり、工夫している（無意識の自覚化）	4.1	4.4	4.5
5	ルールを守れない子どもの指導だけでなく、守れている子を認めている（「支援のいらぬ子は一人もいない」）	4.2	4.5	4.6
6	「アセス」や「いじめアンケート」などの結果を、児童理解と指導に生かしている	4.0	4.1	4.3
【チェック項目2】 学級集団づくり		7月	11月	2月
7	学級として目指す方向（学級目標）を子どもの意見を取り入れながら明確にし、適宜、振り返りを行っている	3.9	4.3	4.4
8	決まりの意味や意義を理解する工夫をし、守っている子どもを認めている（規律の構築）	4.1	4.4	4.6

9	教師の評価だけでなく、子ども同士が認め合う活動を取り入れ、支持的風土づくりに努めている（秩序の構築）	3.3	4.1	4.3
10	係活動や委員会活動等、一人ひとりが主体的に活躍する場や役割をつくり、その取り組みを評価している	3.4	4.1	4.6
11	個を高め、学級を良くしようとする意識と行動が図れる場を設定している（文化の構築）	3.4	3.7	3.9
12	掲示物の工夫、教室の環境整備等、学びの環境を整える	3.4	3.8	4.0
13	机・椅子等の整理整頓等教室環境に配慮し、指導している（ブロークン・ウィンドウ理論…モラルの向上）	3.8	4.1	4.3
<b>【チェック項目3】 授業づくり</b>		7月	11月	2月
14	話し方や聴き方のルールを確立し、授業で学級づくりをしている	3.6	3.9	4.1
15	指導過程に、授業における『5つの徹底継続実践事項』（豊岡市の取組）を組み込み、質の向上を図っている	3.6	3.9	4.2
16	研修テーマや学びを意識的に授業に落とし込んでいる	3.1	4.2	4.3
17	賞賛やうなずきで発言を受容的に受け止め、良さや頑張りを多面的に認めている（「聴く」ことを重視）	4.3	4.6	4.6
18	主体的に活動したり体験したりできる授業展開を工夫している	3.6	4.2	4.1
19	つまづきを予想し、支援の方法を明確にしている	3.8	4.1	4.2
20	視覚的な資料や情報機器で、授業のUD化に努めている	4.1	4.1	4.5
<b>【授業における『5つの徹底継続実践事項』取組状態の評価】</b>		7月	11月	2月
	めあて・学習課題を提示する	4.7	4.8	4.8
	考えを発表する場を設ける	4.1	4.5	4.6
	話し合い活動（ペア・グループ・全体）の場面を設ける	3.9	4.3	4.2
	書く活動・活用する場面を設ける	4.1	4.3	4.4
	振り返りの活動を行う	3.3	4.1	4.2
<b>【チェック項目4】 開かれた学級づくり</b>		7月	11月	2月
21	互いのクラスの子どもの様子や学級経営の在り方について、他の教師と情報交換したり、相談したりしている	4.5	4.7	4.8
22	報告・連絡・相談を迅速に、欠かすことなく行っている	4.5	4.6	4.9
23	専門的な知識や技能をもった外部人材を積極的に活用している	3.4	3.6	4.2
<b>【チェック項目5】 保護者・地域との連携</b>		7月	11月	2月
24	保護者の話を共感的に受け止めたり、問題が起こったときだけでなく、良い情報も報告したりしている	4.4	4.4	4.4
25	通信等で、学級の取組の様子を積極的に発信している	3.2	3.5	3.6
26	問題行動が起こったとき、学校の方針を確認した上で、家庭訪問などで保護者と顔を合わせて対応している	4.0	4.1	4.4
27	地域との関わりを持てる時は積極的に顔を出している	☆	☆	☆
<b>【チェック項目6】 その他</b>		7月	11月	2月
28	学校教育目標や学級目標を常に意識して、指導に当たっている（目指す子ども像を意識した指導であるか）	4.3	4.4	4.5
29	様々な教育活動に対して目的を明確にした指導、評価をしている	3.6	4.1	4.4
30	学校の約束（生活目標、ふわふわ言葉・きらめき行動等の命が喜ぶ生き方の実践）の定期的な評価・振り返り	3.3	4.5	4.9
31	職朝等の講話や指導事項をかみ砕いて話したり、配布物に一言添えたりする等、意味づけし指導に生かしている	4.4	4.6	4.7
32	ワーク・ライフ・バランスのとれた生活を送っている	3.8	3.8	4.1

【5…よくできた 4…できた 2…少し努力が必要 1…かなり努力が必要】

**考察** 年度始めに、職員に学校経営案を提示し、その実現に向けた具体的な取り組みと振り返りを「いのちの教育」の視点で「こどもへの関わり」「学級集団づくり」等、6項目に分類し、「学校経営振り返りシート」に落とし込んだ。コロナ禍にあり、様々な行動制限がある中、職員の自己評価は学期が進むにつれてほとんどの項目で向上傾向にある。特に、試行錯誤を繰り返した人と人との距離を保ちつつ、心の距離を離さない指導法の工夫が効果的であった。校長の使命である子どもも職員も大切にされる学校運営を図ることが、「いのちの教育」の実現につながっていくと確信した。

児童アンケート（筆者作成資料 表2）を作成→取組の成果と課題を検証

表2 数値で見るB小っ子

	項 目	5		4	3	2	1
		R2	R3	R2	R2	R2	R2
1	学校の勉強は将来の仕事や生活に役立つと思いますか	63	80	17	3	0	0
2	自分は学習に意欲的に取り組んでいると思いますか	42	49	38	10	1	2
3	夢や目標を持っていますか	74	75	19	4	2	0
4	決めたことは、やり遂げるようにしていますか（やり抜く力）	☆☆	54	34	10	1	1
5	失敗を恐れずに、いろいろなことに挑戦していますか	47	52	31	11	5	1
6	自分は人の役に立っていると感じるときがありますか	35	53	30	11	4	2
7	自分には良いところがあると思いますか	48	55	31	7	5	2
8	思いや考えを先生や友だちに伝えることができますか	46	57	29	9	4	1
9	気持ちや感情をコントロールすることができますか（自制心）	☆☆	55	30	11	2	2
10	学級の一員として、同じ目標に向かって協力しながら、自分にできることを考えて取り組んでいますか（協働性）	39	69	23	5	2	1
11	地域の一員として、よりよい地域にしようと自分にできることを考えて取り組んでいますか	25	49	34	13	2	2
12	「命が喜ぶ（自分や友だちを大切に）する生き方」を言葉や行動で表そうとしていますか（学校教育目標）	51	72	21	5	1	1
13	B小の生活の約束を守ろうとがんばっていますか（きらめき行動・ふわふわ言葉・命を守る約束）	72	84	12	2	1	1
14	B小に自慢できる良いところがあると思いますか	62	86	11	2	1	0
エクササイズ・リラクゼーション、きらめき行動・ふわふわ言葉、命が喜ぶ生き方の実践							

4～6年生168人対象 令和2年6月と令和3年6月に実施。《数字は%表示》

【5当てはまる 4やや当てはまる 3どちらでもない 2やや当てはまらない 1当てはまらない】  
紙面の都合上、経年変化を見るために令和3年6月実施分においては上記5のみ掲載

**考察** 赴任した年に実践した教育活動の成果が翌年の「子どもたちの自己評価」として高い数字となって現れている。これは、職員が思いを共有し、教育活動を通してその願いが子どもたちへ反映した結果と考えられる。現状に満足せず、職員には全体と個、それぞれの視点で実態を把握し、特に1、2と回答している児童の支援に役立てるよう伝えた。生きる力を育み、国家社会の形成者、人格の形成を目的とする学校教育実現のために、自他を大切に思う心、その基盤である家族や地域

への感謝を忘れない「いのちの教育」を推進することが重要と考える。そのためには、子どもの願いや心の声をしっかり聴き、時代に即した学校運営を継続していくことが不可欠である。

### 終わりに

校長の責任は「全ての児童が安心して学べる教育環境をつくること」「新しい時代を逞しく生き抜いていける真の学力を身に付けさせること」と考える。しかし、新型コロナウイルス感染症がパンデミックとなった社会において、新しい生活様式に基づいた学校生活を余儀なくされ、「当たり前」のことが当たり前にはできない現状であったが、学校、保護者、地域が一体となって知恵を出し合い、試行錯誤を繰り返しながら、子どもたちの学びを止めることはなかった。職員には、どのような状況下であっても、動じず、子どもたちのために「できること」を「できるように」精一杯やっていたと伝えた。それは、校長室に掲げていた「雨がふっても ぶつぶついうまい 雨の日には 雨の日の生き方がある」という東井の言葉に後押しされたものであった。

教育活動は一話完結のドラマで終わってはいけない。東井の著書「村を育てる学力」にあるように、その先を見据えた連続ドラマでなくてはならない。日々、子どもたちの背負うランドセルに込められた本人や保護者の願いをしっかりと受け止め、教育活動に専念することを忘れてはならない。「本物は続く、続けると本物になる」（東井の言葉）多難な時代を生きる子どもたちには、夢や目標を持ち続け、学校や園、家庭、地域で豊かな生活体験を積み重ねることで、自分の命を輝かせてくれることを期待する。

### 引用文献

- 1) 東井義雄. (2007). 東井義雄一日一言：いのちの言葉. 米田啓祐・西村徹（編）. (p.2). 致知出版社.

### 参考文献

- 豊岡市教育委員会. (2020). 第4次とよおか教育プラン. 豊岡市教育振興基本計画.
- 東井義雄. (1992). 東井義雄「いのち」の教え. 株式会社佼成出版社.
- 東井義雄. (1957). 村を育てる学力. 明治図書出版株式会社.
- 豊岡市立東井義雄記念館・白もくれんの会. (2017). 東井義雄いのちの教育2.
- 広岡義之. (2016). 東井義雄の教育思想と教育実践の一考察(2). 神戸親和女子大学研究論叢. 49. 53-59.
- 香川県教育委員会. (2018). さぬきの授業基礎・基本.  
([https://www.pref.kagawa.lg.jp/documents/14668/kisokihon\\_check\\_2.pdf](https://www.pref.kagawa.lg.jp/documents/14668/kisokihon_check_2.pdf))

